別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　新井潤美

新井潤美氏の「英国文化における「ロウワー・ミドル・クラス」イメージの成立と表象—ダニエル・デフォーからカズオ・イシグロまで—」は、英国社会において‘lower middle class’と呼ばれる階層が、いかなる経緯で一つの階級として認識され、いかなるイメージがその文化的属性として付与されたかを、18 世紀から 20 世紀後半までの主に文学作品のうちに辿った研究である。英国社会における「ロウワー・ミドル・クラス」の定義は必ずしも容易ではないが、そのイメージを 18 世紀から現代にいたるまで通観した場合、この階級が‘the Establishment’であるアッパー・クラスやアッパー・ミドル・クラスを脅かす存在となり、それゆえ風刺や揶揄の対象として表象されたという事実がある。本論文は、そのステレオタイプとしてのイメージの系譜を探り、小説や詩、演劇、映画作品等の読みに新たな視角を提供した労作であると認められる。

英国におけるアッパー・クラスは貴族と地主階級によって構成される。これに次ぐアッパー・ミドル・クラスは聖職者、法律家、軍の士官等‘the professions’に携わる者、及び富裕商人等からなるが、これには長子相続制に洩れたアッパー・クラスの‘younger sons’の家系もふくまれる。その下に位置するのがロウワー・ミドル・クラスであり、これには小規模商人や職人、教育により社会的上昇を果たしたワーキング・クラスの人々が含まれる。とくに 19 世紀に台頭した事務員（clerk）たちは、上層階級にとっては戯画の対象として恰好の存在であった。ロウワー・ミドル・クラスを出自とする作家・詩人たちには、自己の出身階級の社会的ふるまいを自虐的に描く例も、数多くあったのである。

本論文は第 1 章「ロウワー・ミドル・クラスとリスペクタビリティ」、第 2 章「ロウワー・ミドル・クラスとしての使用人」、第 3 章「ロウワー・ミドル・クラスの表象」、第 4 章「教育と教養」、第 5 章「郊外の表象」、及び「序論」と「結語」からなる。以下、論文の構成にしたがって、内容の概略を記す。

第 1 章ではロウワー・ミドル・クラスに関する社会的表象の諸前提が確認される。名称は同じミドル・クラスでも、アッパー・ミドル・クラスはアッパー・クラスとともに「上流階級 polite society」と見なされ、ロウワー・ミドル・クラスはワーキング・クラスと同じ階層に分類される。たとえば、同じ弁護士でも事務弁護士（solicitor）はロウワー・ミドル・クラスの職種であり、法廷弁護士（barrister）はアッパー・ミドル・クラスの職種であって、両者の間には大きな溝がある。また、「ジェントルマン gentleman」は爵位のないアッパー・クラスの男子を指す語であったが、やがて教育、趣味、言動が示す内面的美質を指す用法が定着し、疑似ジェントルマン（これを「ジェント」という）が生まれることになる。ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』にも読みとれるように、英国の階級社会において「分をわきまえない」ことは大きな罪であったが、ロウワー・ミドル・クラスは「ジェント」たらんとする上昇志向ゆえに非難と嘲笑を浴びた。また、社会的上昇を可能にするものとして、ロウワー・ミドル・クラスが尊んだ「リスペクタビリティ respectability」は、ロウワー・ミドル・クラスの徳目として、19 世紀のヴィクトリア朝社会においては偽善、道徳的抑圧等の負のイメージを帯びるにいたる。これに反抗したのが 19 世紀末の耽美主義であり、その延長としての日本趣味であるとの見通しも示さ

れる。

第 2 章は、ワーキング・クラスが社会的上昇を果たす回路となった「使用人」について論じる。18 世紀に入り経済的に豊かな階層が厚みを増すにつれ、使用人の需要が急増した。また、ロウワー・ミドル・クラスがみずからをワーキング・クラスと区別するための重要な指標が使用人の有無でもあった。この章では、特別の権限や力を有した上級使用人のうち執事（butler)、ハウスキーパー（housekeeper)、従僕（valet)、乳母（nanny）について数多くの文学作品等が引用され、その具体的なイメージが確認される。たとえば、英国の執事の典型を描いたと解釈されることの多いカズオ・イシグロの『日の残り』のスティーヴンは、執事の戯画として読まれるべきことが主張されるのである。

第 3 章は「事務員」を論ずる。リスペクタビリティを重んじ、新聞や雑誌を読み、サイクリングで健康を維持し、小旅行とデパートでの買い物を楽しむといった振る舞いは、ロウワー・ミドル・クラスの刻印であった。この章では、H・G・ウェルズ、ジェローム・K・ジェローム、ジョン・ファウルズ、アントニー・バージェスらの作品に即して、揶揄や憐憫の対象であったロウワー・ミドル・クラスの悲哀とともに、彼ら自身の自己確認、自己主張が確認される。ロウワー・ミドル・クラスが他の階級と区別されるにあたって重要な指標となる言葉遣いの問題、とくに一人称語りのことばそのものが露わにする階級性といった視点は、本論文が切り開く視角の重要性を証するものとして評価できる。

第 4 章は教育と教養を論じる。英国のアッパー・クラスには努力して教養を身につけることへの否定的反応やプライベートな教育を重んじる伝統があったが、19 世紀以降はパブリック・スクールが典型的な英国紳士を育む学校として新たな伝統を作り上げた。パブリック・スクールは主にアッパー・クラスとアッパー・ミドル・クラスの子弟を対象としたが、その「学校物語」の理想はロウワー・ミドル・クラスにも共有され、疑似パブリック・スクールとしてのグラマー・スクールがロウワー・ミドル・クラス及びワーキング・クラスの学校として彼らの社会的上昇を可能にするようになる。ただし階級的差異は残る。それが如実にあらわれるのが言葉づかいと語彙である。

第 5 章は都市の周縁の郊外を論じる。英国における「郊外 suburbs」は負のイメージを帯びる。それは牧歌的な‘country’と都会的な‘town’に挟まれた中途半端な場所であり、ロウワー・ミドル・クラスの虚栄と趣味の悪さを表す住宅地として表象される。それは小市民的生活への郷愁とこれへの反発を誘う両義的な場所であるとされるのである。

以上の五章を通じ、新井氏は、18 世紀以降の英国社会史の記述を十分に参照しながら、詩、小説、演劇、オペラ、ミュージカル、テレビ番組等から豊富な引例を示し、英国におけるロウワー・ミドル・クラスの表象を縦横に論じる。ジャンルを横断し、古典文学から大衆文化までを視野に収めた新井氏の英国文化に関する造詣、また英語そのものに関する深い理解は、日本における研究の水準を抜くものと認められる。

審査委員からは、階級という扱いの難しい問題に正面から取り組んだ姿勢と、そのことを可能にした新井氏の学識に対する高い評価が示された。読みやすい文体も本論文の特色をなす。一方で、ロウワー・ミドル・クラスの経済基盤および人口動態についての統計的資料の提示が欠けていること、ロウワー・ミドル・クラスと対比されるアッパー・ミドル・クラスに関する記述が薄いこと、再考が望まれる記述が残ることなども指摘された。ただし、これらは本論文の挙げた成果を本質的に損なうものではないことも確認された。

以上の判断により、本審査委員会は、新井潤美氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。